

ハンドメイドによる多彩な品揃えから

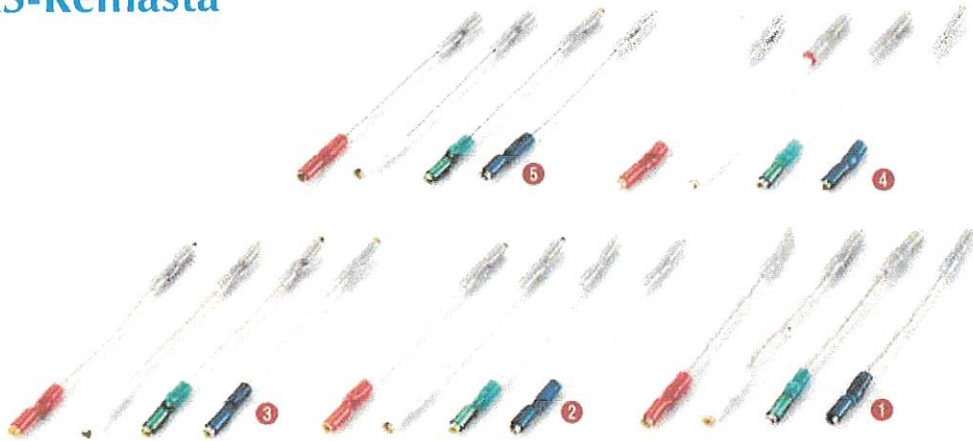
KS-Remastaの手頃なシェルリード  
1万円クラスの5モデルを聴き比べる

## KS-Remasta

Text by  
炭山アキラ

Akira Sumiyama

Photo by 田代法生



日々技術を研鑽し音質向上  
その最新廉価クラスの魅力

KSリマスタのシェルリード  
は、上を見れば数十万円という

2023年モデル ①～⑤の価格は全て¥11,000(税込)

## ①KS-LW-8100EVO.I

●コンセプト:繊細、ワイドレンジ&クリア●導体:海外製8N-OFCクライオ処理、断面積0.36mm<sup>2</sup>●ハンダ:KS-Remasta EVO.Iブレンド

## ②KS-LW-1800EVO.I

●コンセプト:ストレートでパワフル●導体:海外製高純度OFC、直径0.6mm単線●ハンダ:KS-Remasta EVO.Iブレンド

## ③KS-LW-1500EVO.I

●コンセプト:切れ良くハイスピード●導体:国産PC-TripleC、直径0.6mm単線●ハンダ:KS-Remasta EVO.Iブレンド

## ④KS-LW-9500EVO.II

●コンセプト:透明ワイドレンジ●導体:国産PC-TripleC/EX、断面積0.41mm<sup>2</sup>●ハンダ:KS-Remasta EVO.IIブレンド

## ⑤KS-VWS-Spirit.II/N

●コンセプト:明快で色濃くパワフル●導体:1960年代海外製、直径0.6mmブラウンエナメル単線●ハンダ:KS-Remasta N(ナチュラル、ニュートラル)

&lt;共通&gt;●シェルチップ:金メッキ燐青銅●全長:約43mm●チップと導体の結合時、KS-Remastaオリジナル低周波ハイブレーションハンダコテ採用

※全モデル4本組、長さ100mmまで同一価格(MITCHAKU-Zシェル用85mmなども受注可)

※チップは金メッキ燐青銅。標準サイズはシェル側1.0mm、カートリッジ側1.2mm。シェル側1.2mm、カートリッジ側1.0mmも同一価格で受注可

※②③⑤(単線)はDL-102などのモノラル仕様も同一価格で受注可

&lt;試験機器&gt;カートリッジ:ZYX「Ultimate100」、シェル:ZYX「Live18」、フォノケーブル「KS-PHONO-001/EVO.I」、RCAピンケーブル「KS-RCA-001/EVO.I」

商品がそびえる一方、1万円程度の製品も結構充実しているのがうれしい。また柄沢伸吾代表は日々研鑽を続けてノウハウを蓄積しておられるそうで、廉価

クラスの同じ型番でも、数年も経ればぐんとクオリティが上がっている可能性は高い。そこで今回は1万円クラスの同社製品を揃え、新旧比較も交えつつ比較試聴していきたいと思う。

## ●比較用の付属品と初期モデル

まずシェル付属のリードで音を聴いてから、8100EVO・Iの初期製作品を聴く。付属と比べると明らかにS/N感が向上、少し歪みっぽかった高域をスリリと耳当たり良く再現したのは拍子抜けした。気品ある弦と広大な音場感は、もうまるで別物である。

## ①KS-LW-8100EVO.I

続いて同じ商品の2022/23モデルを聴く。もう一聴して音のトゲ、ヒゲが消失し、高域のキツさもさらにはぐれる。音場は深みが増し、音像間のセパレーションも高まった。音楽へスルッと乗っていきける感じた。柄沢代表によると、この変化はフォノケーブルとインターコネクトケーブル製作で習得したノウハウが生きた結果という。他ジャンルからのフィードバックも重要なのだと実感する。

## ②KS-LW-1800EVO.I

続いて単線の1800EVO・Iを聴く。こちらはピシリと筋

が通り、ゴツツと力強いところもありながらそれが重さにつながらず、目にも止まらぬスピードで突き抜けていく。歌手がどつしり構えつつ軽い足取りで舞い、歌う感じが堪らない。攪り線もいいのだが、私は単線が好みに合うようだ。

## ③KS-LW-1500EVO.I

次は1500EVO・Iだ。1800はOFCだが、こちらはPCTリプルC単線。一聴かなり明るめの音だが、それを楽しさに消化できている。輝度が高く、やや濃い目に艶をつけてくるところは、どちらかというとポップス向けではないか。

## ④KS-LW-9500EVO.II

お次は何とPCTリプルC・EXの攪り線を使った9500EVO・IIだ。全体に品良く落ち着いた音で抜けが良く、ある種エロティックなクールさを感じる。これは得難い音質傾向だ。

## ⑤KS-VWS-Spirit.II/N

最後にヴィンテージ単線を用いたVWSスピリットIIを聴いたが、格調高く浸透力のある傾向で、音像の遠近感を確かに表現しつつ、一步引いた音像もどつしりと構える。音場は雰囲気がよく出る。全体に温かみが乗り、実に聴き心地が良い。